

(様式2)

令和5年度地域とともにつくる魅力ある県立高等学校支援事業【実施状況報告書】

学校名：田尻さくら高等学校

1 テーマ・事業名 A区分 伝統文化・さくら Re-born 2023

2 目的 本校生徒は入学時点でさまざまな学習歴を持っているが、特に小学校あるいは中学校において不登校に陥ったことによる学習面での遅れやコミュニケーション能力及び協調性等の未発達を抱えた生徒が多い。入学後も、所属クラスや部活動がなく、授業も個別の時間割で受ける本校のシステムから、結果的に他者との関係性を構築できないままの者もいる。

このような本校の課題を踏まえ、生きていく上で欠かせない他者や地域社会とのつながりを持つ場、共感する姿勢を醸成する場等を設け、将来的に社会で活躍する上での資質や能力の向上を図ることを目的とする。

3 組織 ・地域連携推進委員を組織し、地域に開かれた学校づくりを話し合う（8名）
田尻高校同窓会会長、田尻公民館館長、地域おこし協力隊、行政区長、校長、教頭、主幹教諭
・伝統文化関連教科連絡会を組織し、事業の計画、運営にあたる（9名）
教頭2名、主幹教諭1名（総務部担当）、教諭3名（国語科、芸術科〔美術・音楽・陶芸担当〕）及び講師3名（総務部・「書道」担当・図書情報部）

4 事業内容

実施項目 (実施時期)	ねらい・目標	実施状況	成果	今後の課題	自己評価
① 七夕書道展 (7月) 書き初め書道展 (1月)	書に親しむことで豊かな心情を育む。また、書写や篆刻等のさまざまな活動を通して、個性や能力の伸長を図るとともに、書を生活に生かし、書を学び続ける意欲を育てる。	本校「さくらギャラリー」への作品展示を行った。本校生の作品のみならず社会人聴講生（以下、「科目履修生」）、地域の小中学生及び地域の方々作品も展示して鑑賞してもらった。 	七夕書道展では、生徒や科目履修生が作成した七夕飾りとともに展示することができ、ギャラリーを華やかに彩ることができた。また、近隣の小中学生の作品を展示することで、地域とのつながりを意識する機会となり、地域連携の醸成に繋げることができた。両書道展を行うことにより、校外の作品に触れる機会につながり、書道に関する興味・関心を育むことができた。	今年度から、科目履修生の募集を再開し、多くの作品を展示することができた。小中学生と本校に関係する作品が大多数を占めた。今後は、地域の方からの募集もできるようにし、一般の方の作品を多く展示できる 	A

					ようにしていく事で、地域との交流の場のさらなる推進に努めていきたい。	
②	手品公演 (10月) 南京玉すだれ(2月)	日本の伝統的芸能を鑑賞することで、技のすばらしさや巧みな話術から生きる力及び心の豊かさを感じ取る。	10月の文化祭では地域在住の手品愛好家、2月には宮城県内でも珍しい南京玉すだれの演者を招き、演技を披露していただくとともに笑いや人生についてお話をいただいた。 	ICT環境が目覚ましく進歩している中、本物を生で見えて、体験する機会が少なくなっている。今回手品や南京玉すだれの実演の驚きや実体験を通して、感性を磨くことができた。また南京玉すだれの演者の方からは、自己表現する方法を学ぶことができた。	複雑な家庭環境の生徒が多い本校では、今後も本物に触れる機会を多くし、生徒の生きる力や心の豊かさを育んでいきたい。また、自己肯定感を高め、自己表現する楽しさを学べるような企画をしていきたい。	B
③	天旗づくり (11月)	天旗づくりを通して、凧づくりの伝統文化に触れ、その価値を知る。また、凧づくりの技術や歴史を学ぶことで、日本人としての誇りと自信を育む。	仙台凧の会から講師を招き、地域の小学生とともに凧の起源や日本の凧と海外の凧の違いなどを学び、実際に作った凧を揚げて楽しむことができた。 	沼部小学校6年生を本校に招き入れ、小学生と高校生の混成での班編成で伝統のある凧づくりを体験することができた。 高校生が小学生へ凧づくりの手伝いや会話の場面などの関わりを設けたことで、他者を思いやり気遣うことの大切さや、コミュニケーションの向上につながる取組となった。 	コロナ禍により、4年間実施ができなかった行事であったので、事前の打合せや内容の調整などに時間を有することとなった。また、資材費の高騰もあり、予算面も今後検討すべき内容であった。しかし、地域の小学校との連携は大変貴重な機会となる為、今後も継続して実施できるように準備していきたい。	A
④	高校合同陶芸展	無から有を生むことの素晴らしさや大切さを学ばせ、作品を通して長い伝統文化を持つ	地域の高校生の作品を集めた高校合同陶芸展の開催と陶芸の授業で作成した作品を本校さくらギャラリーに展示した。	中新田高校と貞山高校の協力により開催することができた。校内だけでなく他校の同世代の作品に触れることで、陶芸の奥	今後、高校のみならず、近隣の支援学校からも作品をお借りするなどし、規模を拡大し、開催していきたい。	B

	陶芸、器文化の粹に共感させる。		深さを知り、豊かな感受性を醸成することができる貴重な機会となった。	陶芸の作品は、破損の恐れもあるため、慎重な管理が必要である。今後も管理を徹底していきたい。	
⑤ 七夕茶会 (7月)	日本の伝統文化である「茶道」を通して、お茶の心である「和敬清寂」を理解させるとともに、礼儀作法を学び、おもてなしの心を育てる。	「茶道入門」の履修者が学校説明会等で来校した地域の中学生やその保護者におもてなしを行った。 	生徒が授業で学んだ礼儀作法を外部の方に発表することで、社会性を養い、自己表現する良い機会となった。また、七夕飾りを背景に茶会を実施したことで、参加した方々からも、感謝の声を多数いただいた。生徒の真剣に取り組む様子を見ていただける貴重な機会となった。	新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことに伴い、学校見学会の際に、感染症対策を万全にして実施することができた。そのため多くの人員が必要となったが、科目履修生の協力によりスムーズに進行することができたと共に、科目履修生が生徒とかかわりを深める、良い機会となった。	A
⑥ 藍染め体験 (7月)	藍染め体験を生徒及び科目履修生、地域の方と実施し、自然が作り出す恵みを体感する。	地域で活躍する藍染め職人を講師に招き、藍染めの方法を実体験しながら、日本の染めもの技術を学ぶことができた。また、出来上がった個性豊かな作品を披露し感想を発表することで、自己肯定感を高めることができた。 	生徒が「藍染め」か「たたき染め」を選択し、体験することで、自主性が引き出され、制作に試行錯誤を繰り返しながらも、意欲的に取り組む姿が見られた。 また、出来上がった作品についての発表では、自信をもって発表する場面が見られ貴重な機会となった。	新たに企画した内容であったが、講師と調整もスムーズに行うことができた。たたき染めの際には、大きな音が出るので、会場を工夫した。今後も、自己表現する楽しさを感じる企画を継続していきたい。	A



<p>⑦ ギャラリー展示 (通年)</p>	<p>校舎内のオープンスペース「さくらギャラリー」において、地域の方々の作品や交流のある学校の生徒の作品を展示し、互いに交流を深める。</p>	<p>高校生陶芸作品展、地域写真家愛好家写真展、切り絵作家作品展、地域絵画家作品展等を行い、年間を通じてギャラリーを地域の方々に開放することができた。(地域・学校間交流)</p> 	<p>新型コロナウイルス感染症が5類への移行後の展示となり、今までの展示だけでなく、新たに地域絵画家作品展等も企画に加え、多くの展示を再開し、様々な作品を鑑賞する機会を設けることができた。また、地域の方に、自由にギャラリーを見ていただけるように呼びかけ、開放することができた。</p>	<p>学校安全のための不審者対策や防犯対策をしっかりとした上で、地域の方に気軽にギャラリーを見ていただき、地域との交流の場にしていきたい。</p> 	<p>A</p>
<p>⑧ さくら通信 (通年)</p>	<p>本校の活動の様子を紹介した広報誌を作成し、地域との共生を目指す。</p>	<p>学校行事や科目履修生の学習の様子等を紹介した「さくら通信」を各月と、臨時に発行し、近隣の小中学校や近隣地域全戸や関係機関に配布する。</p>	<p>さくら通信を通して学校の取組を知ってもらうことができた。地域の方々からは、生徒の活躍を賞賛する声や本校の取組を理解していただける機会となった。</p>	<p>地域の方からは、さくら通信を楽しみにしていただいているとの声も届いており、次年度以降も継続して発行し、情報発信に努めていきたい。</p>	<p>A</p>
<p>⑨ 地域連携推進委員会 (12月)</p>	<p>大崎地区(田尻地区)に在住で本校の実情に詳しい方々を本校にお招きし、地域連携の在り方を探る。</p>	<p>本校開校当時の様子や取組について聞き、今後の地域連携や学校PRの方について意見を交わし、今後の本校の在り方について助言をいただいた。</p> 	<p>本校の授業を参観していただいた後に、委員の方と本校の取組や今の学校に求められているものは何かについて意見交換することができた。 今後の地域との交流について在り方など貴重な意見をいただいた。</p>	<p>今年度は49名の社会人の科目履修生を受け入れ、実施することができた。委員からも地域からのニーズや期待が高いことへのお褒めの言葉があった。 学校全体として、開校当初の理念を再確認し、現代の社会、生徒層を分析し、地域とともに進化する学校改革を継続して実施していきたい。</p>	<p>A</p>

事業全体を通じて得られた成果

本校に開校当初からある「さくらギャラリー」を最大限活用することで、生徒が学校に登校したその瞬間から、作品に触れることができる。生徒の感性を深め、登校刺激にもなっていると考える。また、新型コロナウイルス感染症が5類への移行に伴い多くの企画を再開できたことで、地域の方との交流も深めていくことができた。今年度は49名の社会人の科目履修生を受け入れ、実施することができ、次年度の開講を期待している声が多数寄せられ、本校に対する関心の高さ、期待の高さを改めて感じることもできた。今年度は、新たに地域在住の藍染め作家と連携した企画を、細やかに連絡調整を行い、実施することができた。

地域と連携する事業を継続して実施していくことで、本校生徒が地域との交流を通じた社会性の醸成に寄与していると感じる。また、本校の特徴を外部に発信することで地域との交流を進めていく大切な要素となっている。

6 事業全体についての学校としての評価

この数年間、新型コロナウイルス感染症の影響のため様々な行事が実施できず学校生活を過ごしてきた生徒たちに、工夫を凝らして多くの企画を実施することができた。本校の今年度の重点目標である『地域社会との接続を実感し、共感できる学校づくり』を達成するためのとてもいい事業となった。また、育成したい資質・能力としている「社会へ旅立てる力」「コミュニケーション力」を身に付けていくためにも、日本の伝統文化を直接体験することで、豊かな感受性の醸成や日常生活における心の余裕につながったことと考えている。

また、さくら通信を通して、定期的に本校の多様な取組に関心を持っていただく、とてもいい機会を作ることができた。次年度は、科目履修生の受入れる科目及び人数を広げることで、地域の「生涯学習の場」としての本校の役割を充実させていく。変動が激しい社会の動向や、生徒の質を考慮し前進し続ける学校として、今後も欠かせない事業であると考えている。

7 学校の取組及び成果の公表状況

- ① ホームページ ② 学校便り等 ③ 発表会等（発表会等名：みやぎ高校生フォーラム）
④ その他

- 3 令和6年1月28日に開催された「みやぎ高校生フォーラム」では展示発表の際に、本校の特徴ある学校設定科目や地域連携について説明することで、本校の取組を県内の高校生の方々に知っていただくことができた。
4 地域イベントの「田尻ほなみふれあいまつり」への参加や、文化講演会での交流を通して、本校の取組を外部に発信している。

【記入上の注意】

- 「1」はテーマA・Bの区別と、事業名を記入してください。
- 「4」の「実施状況」は、生徒の活動の様子がより具体的に分かるように、写真などを入れるなど工夫して作成してください。
継続して複数年での取組を計画している場合は、「今後の課題」にその旨を記入してください。（次年度の参考資料とします。）「自己評価」は、課題解決に向けたこれまでの取組を、「A（良好）、B（概ね良好）、C（やや不十分）、D（不十分）」で評価してください。
- 「7」は該当する番号に○をつけ、3・4については詳細を記入してください。
- 報告書の枚数は問いません。事業の実施状況が分かるように記入してください。